

『石清水物語』 試論

大倉 比呂志

一

『石清水物語』では上巻は『源氏物語』の影響の他に『狭衣物語』⁽¹⁾が、下巻においては『夜の寢覚』の影響が既に指摘されており、その他、『うつほ物語』、『浜松中納言物語』、『松浦宮物語』、『しのびね』、『海人の菟藻』、『住吉物語』、散逸物語『末葉の露』の影響関係が言及されているわけだが、⁽²⁾小稿では従来指摘されていなかった『堤中納言物語』(『逢坂越えぬ権中納言』、『花桜折る少将』)と『蜻蛉日記』、『更級日記』の影響関係について述べていくことにしたい。

上巻で、秋の君は木幡で垣間見た姫君を忘れることができず、その姫君を訪れる件は、

①「なほ、ここばかりにいざり出でさせ給へ。余り多く思ひ集むることをば、人づてにはいかが聞こえやるべき。かく聞こえ伝へ給ふ人も苦しからむを、物越しにて、申さむことばかりを聞き給はむことは、何ばかりのことか侍ら

む」と(秋の君が姫君付キノ侍女デアル宰相ニ)のたまへば、(宰相が姫君ノモトニ)入りて聞こえむとするに、二十余日なれば、月ころもとなきに、いと暗く、何のあやめも見えず、宰相が入りたるしりにつきて、やをら続きておはするも知らず。……(侍女タチガ姫君ニ秋の君ニ應對スルヨウニ説得シテ出テ行ツタノト入レ違イニ姫君ニ近付キ、秋の君ガ口説イテイタワケタガ)宰相は(尼君ニ)もの聞こえむとて出でたれば、人もおはせず。(秋の君ガ)出で給ひぬるかとお出でて見れど、さりげもなく、……(上二二八―二九)

と語られている。ところで、天喜三年(一〇五五)五月三日に行なわれた「六条斎院祿子内親王家物語合」に小式部作として提出された『逢坂越えぬ権中納言』では、男主人公である権中納言が根合で勝利を収めた後、以前より冷淡であった姫宮を訪れた件が、

②「例のかひなくとも、かくと聞きつばかりの(姫宮ノ)御ことのはをだに」と(権中納言ガ姫宮付キノ侍女デアル宰相の君ヲ)せめたまへば、「いさや」とうちなげきて入るに、(権中納言モ)やをらつづぎて入りぬ。……(宰相の君ガ姫宮ニ権中納言ノ懊惱シテイル姿ヲ語りハシタモノノ、姫宮ノ反応スル様子ガナカ

ツタノデ、ツノ旨ヲ権中納言ニ伝エヨウトソノ場ヲ立トウトシタトコロ) 声をしるべにて、たづねおはしたり。……(権中納言ハ姫宮ニ心中ヲ訴エテイタワケダガ) ④ 宰相の君、出でて見れど、人もなし。

と語られており、両者の傍線部を比較すると、①と①、①と①、②と②とが余りにも類似した表現であると同時に、姫君(姫宮)付きの侍女として宰相(宰相の君)という同一名の侍女が登場している。そのうえ、内容的には両者とも男君が容易にはなびかない姫君(姫宮)を口説いている場面であるとともに、結果的に姫君(姫宮)との情交に失敗したという点(ただし、『石清水物語』では秋の君に姫君とは異母兄妹であると知らされ、情交寸前で阻止されている)から考えると、両者の影響関係は歴然としていいると思量される。『石清水物語』の作中和歌が文永八年(一二二七)に成立した『風葉集』に五首採られていて、両者の成立の前後関係を明確にはしがないが、『逢坂越えぬ権中納言』が『石清水物語』に影響を及ぼしたものと考えられよう。

さらに下巻において、入内予定だった姫君の父親左大臣(後に関白)に對する八幡大菩薩の「あだ人の重ねし夜半の衣手を雲居にいかと思ひ立つべき」なめげにやあらむ(下・一一五)の夢告により、姫君の非処女が言及されたために、父親は入内を断念し、姫君は老齡の中務宮と結婚させられるわけだが、亡き北の方の物の怪にとりつかれた中務宮と一時的に別居して、姫君が父親邸に里下がりしていた折、中務宮からの呼び出しという体裁で今上帝が姫君を拉致略奪した件は、後に中務内侍の父親に對してなされた説明として次のように語られている。

③「年頃(姫君ノ)御かたちめでたしと(今上帝ハ)聞きおかせ給ひて、さばか

り心もとなしと(入内ヲ)待ちわびさせ給ひしを、御参りのむなしくなりにしことを口惜しく思しめされしに、宮(中務宮)のかく頼みなくおはしまずと聞かせ給ひて、『もし(中務宮ガ)はかなくなり給ひなば、けがれにもこもり、(姫君ハ)さまなどもかへさせ給ひなん。さらぬさまにたばかれ』とせめさせ給へれど、我々の御事ならねば、うしろめたくはいかがとて、仰せ事をそむき侍りしかば、知らさせ給はで、御心と構へ出ださせ給へる。……」(下・一三九)

とあるごとく、最終的に今上帝自身が姫君を宮中に拉致するという実力行使をしたのである。これは『花桜折る少将』の巻末において、男主人公が以前に垣間見し、入内の噂のある姫君をその前に拉致略奪したのと同趣向である(実は拉致されたのは姫君ではなく、祖母の尼君であったわけだが)。『石清水物語』と『花桜折る少将』とはともに『風葉集』に作中和歌が採られているために、成立の前後関係は不明であるが、両作品は同傾向の話筋を持つ物語として考えられるのではなからうか。

* * *

『更級日記』の影響関係は後述することにして、『蜻蛉日記』のそれに関して述べていくことにする。

④殿(左大臣)はただ(北の方女四宮ト)同じさまに並び臥し給ひて、ことわりにも過ぎたる御けしきを、今は言ふかひなき御事(注一 女四宮の死)はさるものにて、またこれ(左大臣)をもてわづらひきこえて、とかく慰めきこえ給ふ。(上・四〇)

⑤姫君はあさましと思しまどはれしに、気のはりけるにや、苦しげにし給ひて、御湯をだに見入れ給はねば、厄上のごとはさし置きて、またこの御事

〔注一 姫君の世話〕を誰ももて騒ぎたり。(下・一〇六)

④は女四宮の死によって落胆し、病人と化した夫の左大臣の状況が語られ、
⑤は尼上(尼君)の病気見舞いに木幡を訪れた姫君が伊予守に闖入されて
犯された結果、懊悩し、尼君のように病人と化してしまった状況が語られ
ている。⑤は④と多少趣を異にしているが、ともに死者(病人)のことを
放棄して、病人と化している生者(左大臣と姫君)の方に周囲の人々の主
力が注がれていると語られているのである。それは『蜻蛉日記』上巻康保
元年(九六四)で道綱母の母親が長患いの末に死去した件は、

⑥日ごろ月ごろわづらひてかくなりぬる人(≡母親)をば、いまはいふかひな
きものになして、これ(≡道綱母)にぞ皆人はかかりて、まして「いかにせ
む。などかくは」と、泣くが上にまた泣き惑ふ人多かり。

と語られており、傍線部の三個所に注目すると、死者並びに病人を捨てて、
衝撃を受けた人物の世話に周囲の人々が奔走しているという点で共通して
いる。以上の点から、『蜻蛉日記』のこの個所が④⑤の叙述に影響を及ぼ
したものと考えられる。

一一

『石清水物語』において用いられている〈面影〉という語は十一例あり、
それらは本作品では恋と関わりしていると考えられるわけだが、四つのグル
ープに区分することができる。

④秋の君↓姫君(四例)

○秋の君ハ道すがらも(姫君ノコトガ)心にかかりて、面影のみおぼえて、……
(上・一九)

○秋の君ニトツテ)ありつる(姫君ノ) 面影は身を離れず恋しう、……
(上・一九)

○秋の君ノ姫君ヘノ贈歌)

花ゆゑに恋しき人(≡姫君)の 面影を誘ふたよりの春風もがな(上・二〇)

○珍らかなりし(姫君ノ) 面影のみ尽きせず(秋の君ニトツテ)恋しかりけり。
(上・二四)

⑤春の君↓兵部卿宮女(一例)

○大殿(≡関白入道)の権中納言(≡春の君)はいかにして(兵部卿宮女ヲ)見給
ひけむ、ほのかに見し御面影も思ひ出づるに、……(上・三七―三八)

⑥伊予守↓姫君(四例)

○姫君ヲ) 面影にのみおぼえて恋しく(伊予守ハ)思ひ出できこゆるを、……
(上・四〇)

○空しき跡の(姫君ノ) 面影だに残らぬを見るに、(伊予守ハ)いみじう悲しく
つ、……(上・七〇)

○ありつる(姫君ノ)御面影のみつと(伊予守ニ)そひて、……(下・一〇〇)

○「今はこの世のうちのけぢかさは、思ひたへて侍れば、身を離れぬ(姫君ノ)
御面影の忘るるよなく、関守なき夢路にだに、とけて寝る夜なければ」など
(伊予守ハ)言ひもやらず、……(下・一二四)

⑦秋の君↓伊予守(二例)

○常よりことに(伊予守ガ) 面影に見えて、恋しう(秋の君ガ伊予守ヲ)思ひ出
でられ給ふままに、……(下・九二)

○(伊予守ノ)若ういみじかりしさの惜しう悲しく面影のみ(秋の君ニトッテハ)おぼえて、恋しきことこそかぎりなかりけれ。(下・一五〇)

以上により、『石清水物語』においては四組の恋模様語られているわけだが、そのうちの④と⑤とが主要な関係であり、⑥は男色関係である。特に④において、伊予守と姫君との相互通行の恋が一応成立したかに見えながらも、姫君入内のために頓座するのであって、結果的にこれらの恋は完遂することはない。⁽⁴⁾とすれば、『石清水物語』で語られている恋は片側通行の恋であり、それがこの物語の特色の一つなのだと考えられる。さらに、本作品における〈面影〉の使用状況は〈男〉から〈女〉に対して用いられているだけであって、その逆がないということは、伊予守という武士が主要な登場人物となっている点に表象されるように、武士の登場する〈男〉中心の時代相と関わっているのではなからうか。

三

『更級日記』冒頭部は「あづま路の道のはてよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを」と起筆されており、『石清水物語』冒頭部においても常陸国が舞台となっている。ここでは姉の尼君(注―常陸守北の方で、後に木幡尼君)が上京した折、妹である宰相の君(注―姫君の母親)を頼って「道のはてなるかことをも語り合はせむと思ひ立ちけるに」(上・五)と語られており、伊予守(注―尼君が継母)も「道のはてより生ひ出でたる人」(上・六一)と記されている点からすれば、『更級日記』冒頭部の影響が考えられよう。あるいは「この鹿島の常陸帯

は、とくる夜もなく片結びにてのみ、明くるる月日にそへて、苦しさ増さりゆくを嘆きわびて、そなたの雲をながむれど、むなしき空のながめもかひなきままに」(上・七〇)とあるごとく、伊予守の姫君に対する恋慕が語られていることから、「あづま路の道のはてなる常陸帯のかことばかりもあひ見てしがな」(古今六帖・五・紀友則)の影響も想定できようが、いずれにせよ『更級日記』との表現の類似性は否定できないのではなからうか。ところで、春の君と呼ばれるのは入道閑白の三男であり、秋の君は弟の左大臣の二男であって、二人は「とりどりに劣らぬ光にぞものし給ふ」(上・八)、「春の少将、秋の侍従とつけ奉りて、とりどりに定めかねたる山口なり」(上・九)などと語られているように、甲乙つけがたい人物として登場するわけだが、

○ふたつを並べては、なほ秋の中將は静かに頼もしき所見ゆる人様なれば、(先帝||桂院ノ)御心寄せまさる。(上・一三)

○この秋の中納言は、もとより(先帝ノ)御心寄せありて思しめされければ、……(上・五三)

○この女二宮の御事を心がけきこえ給ひて、折々ほめかし申し給ひければ、秋にひく(先帝ノ)御心にて、かく定まり給ひにければ、……(上・五四)

とあるように、先帝の〈秋〉重視は何を物語っているのだろうか。

ちなみに、春秋優劣論争は『万葉集』(巻1・一六)に「天皇、内大臣藤原朝臣に詔して、春山万花の艶と秋山千葉の彩とを競ひ憐れびしめたまふ時に、額田王、歌を以て判る歌」の詞書があり、額田王は長歌の終わりで「秋山そ我は」と〈秋〉に肩入れをしているのに始まり、『源氏物語』において、「大和言の葉には、秋のあはれをとりたてて思へる」(薄雲巻)や

「春秋のあらそひに、昔より秋に心寄する人は数まさりけるを」(野分巻)とあるごとく、〈秋〉の優位性が語られている一方、須磨巻で光源氏が左大臣に別れを告げに赴いて退出する件は、

⑦明けぬれば、夜深う出でたまふに、有明の月いとをかし。花の木どもやうやう盛り過ぎて、わづかなる木蔭のいと白き庭に薄く霧りわたりたる、そこはかとなく霞みあひて秋の夜のあはれに多くたちまされり。

とあり、傍線部により〈春〉の優位性が語られていることが理解される。さらに胡蝶巻で、紫上(春)が秋好中宮(秋)に勝利を収めたことが「昨日の(秋好中宮方ノ)女房たちも、『げに春の色はえおとさせたまふまじかりけり』と花におれつつ聞こえあへり」とあるように、〈春〉の優位性が語られているわけだが、『源氏物語』とほぼ成立時期を同じくする『拾遺集』には「題知らず よみ人知らず」として「春はただ花のひとへに咲くばかり物のあはれは秋ぞまされる」(雑下・五二一)と〈秋〉の優位性が詠まれている。以上のことから、『源氏物語』においては〈春〉と〈秋〉との優劣が定まっておらず、優劣のつけがたい状態であったことが理解される。

ところで、『更級日記』において祐子内親王家に出仕していた孝標女が不断経の夜、源資通と春秋優劣に関して話をした際、資通の会話として、

⑧「時にしたがひ見ることには、春霞おもしろく、空ものどかに霞み、月のおもていと明うもあらず、遠う流るるやうに見えたるに、琵琶の風香調ゆるるかに弾きならしたる、いとみじく聞こゆるに、また秋になりて月いみじう明きに、空は霧りわたりたれど、手にとるばかりさやかに澄みわたりたるに、

風の音、虫の声、とりあつめたる心地するに、箏の琴かきならされたる、横笛の吹き澄まされたるは、なぞの春とおぼゆかし。……」

と語られており、傍線部において〈秋〉の優位性が暗示されている。その直後に居合わせた孝標女と同僚女房に対して資通が尋ねた件は、「『いづれか御心とどまる』と(資通ガ)問ふに、秋の夜に心を寄せて(同僚女房ガ)こたへたまふを、さのみ同じさまにはいとはじとて」とあり、傍線部のように資通は〈秋〉傾倒派であると察知して、孝標女はあえて反対の立場に立つとうとして〈春〉を推賞する歌を詠み、三人で〈春〉と〈秋〉の季節に肩入れた歌を各々詠んだこと(同僚女房は〈秋〉に肩入れ)が詳細に語られている点を考えると、その後で資通は〈冬〉の夜の素晴らしさを語ってはいるものの、〈秋〉を優位とみなすのが一般的であったのではなからうか。とすれば、『石清水物語』における〈秋〉の優位性は『更級日記』の影響を蒙っていると推測されると同時に、春の君は作品世界での位置が軽く、秋の君が重く扱われているのは、〈秋〉を重視するという当時の風潮をも反映しているものと考えられる。

四

『石清水物語』冒頭部近くで、伊予守は常陸守を父として持ち、

⑨この常陸も、もとの根ざしは帝の御筋にて、なにがしの親王とか申しけるが、いかなる乱れにありけむ。その末々あまたになりければ、もとの身を変へて、あやしき民のふるまひをして、弓矢取るわざを次第につきづきしくもて行くほどに、かかるもののふにぞなり定まりたりける。源氏あまた国のお

ちにもきこゆれど、これはむげにまちかき流れになむありける。(上・七)

と出自が語られているように、祖先を辿っていけば某親王の末裔で、武士となつたのである。そのような意味において、流浪王族の流れを汲む者であった。それに対して姫君は母親が尼君の妹であり、母親も夫左大臣の北の方である女四宮から迫害を受けた結果、姉から誘われて常陸に赴き、そこで生まれたのであって、いわば姫君は最初から流浪の人生を辿らねばならなかったのだ。ちなみに、姫君は、常陸↓木幡↓左大臣邸↓中務宮邸↓左大臣邸↓宮中へ、というように、僻地↓周辺↓中心へ、と移動しているのであつて、いわば〈貴種流離譚〉の枠組みの中で語られているといえよう。

ところで、姫君と父親を同じくする秋の君は母親が女四宮(桂院と兄弟)であり、北の方は女二宮(桂院の娘)という皇族であるがゆえに、伊予守は身分的には問題にならない存在だが、最初に姫君のもとに闖入した男は秋の君であつたのにもかかわらず、情交寸前に秋の君と姫君とが異母兄妹であると判明したために、秋の君は情交を断念せざるをえなかったのに対して、伊予守にとって姫君との情交が三回成立したのであるから、姫君をめぐむる優位性は伊予守の方が獲得したといえよう。すなわち、伊予守の出自が王族の末裔であつたために、母親と北の方とが皇族出身である秋の君に勝利できたのではなからうか。伊予守が姫君付きの侍女である弁に「三津瀬川ばかりは、さりとて違へさせ給はじと思はるるのみに、慰み侍りぬる」(下・一四二)と姫君の入内後に語っている点からも、姫君にとつての最初の男は伊予守だったのであり、そこに伊予守の優位性が語られているのだ。

五

確かに姫君にとって伊予守は最初の男であつたわけだが、情交成立の直後から、

○かかるあやまちをし出でつるは、げに我が心とも(伊予守ハ)おぼえず、……

(下・一〇二)

○「心よりほかのあやまちをば、然るべき契りと思しなせ」と(伊予守ハ姫君ヲ)慰めきこゆるけしきほのかなれど、……(下・一〇三)

○さてもあさましきあやまちをもし出でつるかな。……と、(伊予守ハ)悔しく、

悲しきこと限りなし。(下・一〇四—一〇五)

○一たび心よりほかのあやまちとて、夢になしてやみなむは、……と、つれなき命を(伊予守ハ)思ひ續けて、ながめ臥したり。(下・一〇六)

と語られているように、伊予守の姫君に対する「あやまち」が反芻され、さらしに、

○(姫君ハ)ゆゆしきまぎりにこそはなり給はめと(伊予守ガ)思ふも、いたはしくおそれ深く、……(下・一〇五)

○玉(姫君)にきざをつきこえぬるとが、そら恐ろしく、我(伊予守)も悩ましければ、……(下・一〇六)

とあるごとく、伊予守の姫君への「あやまち」が姫君に「きざ」を与えることになってしまったと反省した結果、「今死ぬるわざもがなと思」(下・一〇四)っているのであつて、伊予守は自ら犯した行為に対して苦渋の連

続であったと語られている。すなわち、伊予守にとっての姫君とはそれほどまでの代償を払ってでも契る価値のある対象だったのだ。それは伊予守が「幼なかりし目にも（姫君ノ）めでたき御様」（上・二二）が脳裏に焼き付いていたためだが、尼君から姫君への接近が禁止されていたがゆえに、姫君の素晴らしさが増殖されて美化されていたという点は否めないものの、左大臣は姫君が自分の娘であることを知る以前から、入内商品としての娘がいけないことを嘆いており、伊予守は娘がいれば入内させようとする左大臣の気持ちが並々ではなかったことを充分知りながらも、姫君に執着せざるをえなかったのだ。⁽⁵⁾このような伊予守の二律背反的でありようは、伊予守が戦乱に勝って都に戻った折、

⑩八月には、（姫君ガ）内へ参り給ふべしとて、……この世にて今一度、ありしばかりの一言を人伝てならで聞こえ知らせて、山道をも尋ね入るるべにもせむ、かくながら跡絶えむことはいと悲しければ、……（下・九四）

とあり、伊予守が尼君の病氣見舞いに来ていた姫君を犯した後に、伊予守の長い心中思惟が次のように語られている。

⑪さばかりいたはしく思ひならはしたてまつりて、並々ならむ際に思し立たむことは、あかずおぼえて、内へ参らせきこえむと、殿（左大臣）の思しそぐを聞くは、いみじううれしくて、我あるまじき心のつき始めにしは、ひとへに身のいたづらになるべき端と思ひとちめてしかば、いたみならず、この御ためいさぎよくて、雲居にも定まり給はむを見きこえむをのみ、嬉しくかたじけなくこそ思ひ給へしに、いかにしつることぞやと悔しく、悲しきこと限りなし。（下・一〇四—一〇五）

ここでは傍線部と波線部とに伊予守の対照的な心中が繰り返し語られており、姫君が入内するのは後見者である伊予守にとっては喜ぶべきことであるのに、その姫君に恋慕して犯してしまったという伊予守の反省が同居しているのである。これ以降にもこのような例は二例ほどあるわけだが、伊予守の心中が両極的に分裂しているのだ。それは伊予守が貴族としてではなく、大番役の武士として上京しているという外面的に二律背反している状況とも連動しているのだといえよう。

ところで、姫君に執着している伊予守に対する秋の君の同性愛が「まことに浅からず契り語らひ給ひて、人目驚くばかりなるを」「おきふしむつれ給へば」「かしこまりおきもあへず、乱りがはしくなりゆくにつけても」（以上、上・五二）とあるように、執拗に語られているのであり、伊予守もそれに耽溺せざるをえなかったのである。というのは、姫君と秋の君とは異母兄妹であり、姫君の母親の姉である尼君が伊予守の継母であるという関係から、秋の君と伊予守とが相互的に姫君の（へかり）を求めることによつてしか自己を存立できなかったからなのだ。だが、伊予守にとって姫君という本体を知つてからは、同性愛による擬似性は必要ではなくなったのだ。⁽⁶⁾それは次の引用文によつてうかがうことができる。

⑫大将殿（秋の君）よりは、尽きせずめしまつはして、明け暮れ向かひ給はまほしく思したれば、かつは心や慰さむと、常に参りて、御宿直に候ふに、例の、「御かたはら近く」とのたまへば、今はさすが年もきびはならねば、かしこまりおきこえて、さしのきなどするを、「同じ心ならず」と恨み給ふ。（下・一三二—一三三）

と語られているように、秋の君が伊予守に対して同性愛行為を促しても、

姫君を知ってしまった伊予守にとっては、秋の君という姫君の代用は不必要になってしまったのだ。それは心理的に伊予守が秋の君よりも優位な立場に立脚してしまったことを意味しよう。すなわち、姫君にとっての最初の男であると同時に、秋の君という姫君の〈ゆかり〉を必要としなくなったという点において、伊予守が秋の君に対して二重の意味での優位性を獲得したのである。

しかし、姫君が帝によって拉致略奪されたために、姫君との情交の可能性を〈喪失〉した伊予守は姫君を盗み出してしまおうと思うものの、結局、現世における姫君との情交を断念して、姫君が宮中に拉致されて〈失踪〉したように、来世における姫君との再会を念願して（後述の引用文⑬の歌を参照）、伊予守は高雄で出家した後、「善光寺といふ所に参りて、余念なく行なひすまして、いづくにありといふことを知られじと思ひければ、きこゆることなし」（下・一五二）に表象されているように、〈失踪〉するのであり、姫君のそれに対応しているのである。

六

ところで、伊予守は出家する直前に秋の君あてには「白き唐の色紙」（下・一四九）におそらく「平仮名」で歌を書いたのに対して、姫君には、

⑬人々立ちぬる間に、中にありし物広げて（弁ガ伊予守カラノ文ヲ姫君ニ）見せ
たてまつれば、ことばはなくて、片仮名にて、

君ゆゑに尋ぬる法の道なれば同じ蓮の身ともならなむ

とばかりあり。（下・一五一）

とあるごとく、わざわざ「片仮名」で歌を書いたのである。なぜ、伊予守は姫君への歌を「平仮名」ではなく、「片仮名」で書いたのだろうか。伊予守は出家するわけだから、仏典に取り囲まれた生活を送るということであり、「片仮名」＝男文字が充満した空間で居住することを意味すると同時に、「片仮名」＝〈男〉を強調することによって、入内以前と同様に姫君と来世において再会したいという願望が内在化されているのではなからうか。このように「片仮名」で伊予守が歌を書いたということには二重の意味が内包されているといえよう。

そこで『狭衣物語』に目を向けてみると、一つの作品において同一人物、それも男主人公が三回も「片仮名」で歌を記している点は特記すべき事項ではなからうか。というのは、そのような例は『源氏物語』にはなく、おそらく『狭衣物語』が初出であると考えられるからだ。「蓬が門の女」が「しらぬまのあやめはそれと見えずとも蓬が門は過ぎずもあらなん」という歌を狭衣大将に詠みかけてきた件は、

⑭御隨身ども、そのわたりに筆求めて持て参りたれば、経紙などのにや、泥の着きたるぞありける。豊紙に、^⑮あらぬ筋に紛らはして、

見も分かで過ぎにけるかなおしなべて軒端のあやめ隙しなければ

「いまわざと参らむ」と言はせたまひて、「童の入らむ所見よ」とぞのたまひて、過ぎたまふ。（巻一）

と語られている。傍線部⑮「あらぬ筋に紛らはして」は素姓を隠そうとして筆跡を変えての意味であるが、大半の伝本は「片仮名」と記されている。さらに傍線部⑭の箇所は、例えば伝為明筆本では「御すいしんそのわたりにて筆もとめてたてまつりたるして御たゝうかみにてかたかんなにて」

(多少語句の異同はあるが、伝為家筆本・伝清範本もほぼ同じ) という伝本に表象されるように、第二・三・四系統本では「経紙などのにや、泥の着きたるぞありける」の個所がなく、「畳紙に、片仮名にて」と記されているだけであり、第一系統本は仏教色を強く打ち出している点から、「日常化する仏道への思いを如実に示す経紙の携帯、それを用いた風流な贈答に見えるように、恋と仏道が矛盾なく絡み合う狭衣のあり方を早々に提示してゐる」と解されていて、問題の残る個所である。

⑮(源氏宮ノ) 前なる人々の絵描き散らしたる筆どもの散りたるを取り給ひて、紙の端に、

かつ見るもあるはあるにもあらぬ身を人とは思ひなすらん

手すさみのやうに、片仮名に書きて、この猫の首に結びつけて、「あな、寝きたな。今は起きて参りね」と、(狭衣大将ガ) 押し出でたまへれば、(猫ハ) 聞き知り顔に、他所さまにも行かず、(源氏宮ノ所ニ) 参りて睡れまゐらすぞうらやましき。(巻三)

における傍線部の個所に関して「正式でない場合であり、又料紙も改まった色紙などでない事」⁽⁸⁾であると考えられているが、この場合は「咄嗟の気楽な手すさびに見せるのであろう。同時にここは特に注意をひきたい気持もあろう」⁽⁹⁾と考えられ、さらに「諧謔の姿勢もあるかもしれない」⁽¹⁰⁾と理解すべきだろう。

⑯(女二宮ノ) 薄鈍なる御扇のあるを、せちにおよびて取らせたまへれば、懐しき移り香ばかり昔に変わらぬ心地するに、華やかならぬ下絵のさま変りたるは、いとあはれに、(狭衣大将ハ) 飽かず悲しう思されけり。

手に馴れし扇はそれと見えながら涙にくもる色ぞことなる
と片仮名に書きつけて、もとのやうに置きたまうつ。(巻四)

とあり、狭衣大将は独詠しているわけだが、その歌を書き付けたのであるから、女二宮に見られる可能性があるために、筆跡を隠そうとしたのであろうか。

そこで⑮⑯の個所を要約すると、⑮では既に源氏宮は齋院となっており、⑯においては女二宮は出家しているわけだから、ともに狭衣大将の側からすれば、二人とも恋の対象からは逸脱していることになる。⑮は源氏宮への思慕の情が詠み込まれているわけだが、「片仮名」||〈男文字〉で書き記して源氏宮のもとに届くようにその歌を猫の首に結んでいるところから、一品宮と結婚してはいるものの、それは幸福な状態ではなく、相変わらず源氏宮を思慕していると「手すさみのやうに」書いている点に注目すると、自己戯画化風に源氏宮に対して屈折した思慕の情を吐露しているのであって、昔のように源氏宮に恋をしたという願望を嘆訴しているのではなからうか。そのために狭衣大将は〈男〉を顕在化しようとして「片仮名」||〈男文字〉で記したのだ。⑯は女二宮を不幸な状態に追い込んでしまったことに對する狭衣大将の自省と思慕とを詠むために、「片仮名」で書き記すことによって、〈男〉としての狭衣大将を強調しているのであり、それが「いとあはれに飽かず、悲しう思さ」る狭衣大将の胸中を浮き彫りにしているのではなからうか。とすれば、『狭衣物語』における⑮⑯は俗世から考えれば恋の対象外になった一人の女性に対して、狭衣大将が「片仮名」||〈男文字〉で書き記すことにより、〈男〉を強調して思慕を訴えているのであって、それらは〈性〉に関わるものと考えられよう。

さらに、「片仮名」で書くということが〈性〉に関わっているという点では、『虫めづる姫君』においてもうかがうことができよう。偽物の蛇が貴公子から贈られた姫君は、侍女たちからとにかく相手に返事をするように促されて返歌するわけだが、その件は、

⑭いとはく、すくよかなる紙に書きたまふ。仮名はまだ書きたまはざりければ、片仮名に、

「契りあらばよき極楽にゆきあはむまつはれにくし虫のすがたは
福地の園に」とある。

と語られている。この姫君の年齢は、冒頭部近くにお齒黒をつけていないし、眉毛も抜いていないという描写があるところから、少女と女との境界線上であると考えられる。さらに父親は按察使大納言であるから、姫君は后がねとして教育されているはずであり、当然のことながら「平仮名」の教育がなされていると考えられるが、「平仮名」は未熟であるために「片仮名」で書いたとあり、また、漢字の練習をしていたとも語られている。これは〈女〉であることを拒否してきた姫君が〈男〉の表象である「片仮名」で記したわけであるから、『石清水物語』の例と同様に、〈性〉という問題に連関しているといえよう。

また『兵部卿物語』において、兵部卿がかつて契った按察大納言女（按察君）は、兵部卿と結婚した右大臣の姫君のもとに出仕したが、それが兵部卿に知られたために、昔父親が嵯峨野に所有していた家に侍女の侍従とともに隠れ住んだ後、右大臣邸の按察君の局で親しい同僚の中納言君が按察君の残した歌を発見する件は、

⑮常より（按察君ガ）る給ひし障子のつまに、いと小さく物の書かれたるを、
寄りて（中納言君ガ）見給へば、その人（＝按察君）の手にて、

ながらへばなほも憂き身は白雲の八重たつ山をわけぞ見るべき

と片かなにて書きつけ給ひしを、見いで給うて、いとどあはれに悲しくて、

……

とあり、〈女〉である按察君が「片仮名」で歌を書きつけておいたと語られているが、歌の内容から出家志向がうかがわれるのであって、按察君が〈女〉を捨てて生きていこうとする意志表示をするために、あえて〈男〉の表象である「片仮名」を用いて自己確認をしたのではなからうか。とすれば、これも〈性〉と関わっているといえよう。

次いで『風に紅葉』においては、

⑯還立、夜に入りてあるに、（大将ガ）過ぎ給ふ御簾のうちより御袖をひかへて、
いささかなるものを御手に入るるをさすが落とさじと引きそばめて見給へば、
いろいろの挿頭の花もなにならず君がにほひにうつる心は

片仮名に、なべてならぬ書きざまなり。（巻一）

とあるように、後に「かの『挿頭の花』言ひかけ給ひしは、この人々（注一）右大将や左衛門督の兄弟で、父親は太政大臣、後に関白）の御妹、梅壺の女御なりけり」（巻一）と語られており、大将（後に内大臣）に贈歌したのは梅壺女御であったことが判明するわけだが、なぜ梅壺女御は「片仮名」で歌を書き記して大将に贈ったのだろうか。歌の内容からすれば、女の方から大将に思慕の情を告白しているわけだから、恥じらいがあったのではないかと想定されると同時に、大将にインパクトを与える目的で意図的に

「片仮名」で書き記したのだろうかとも考えられる。あるいは、梅壺女御が女御という立場であるために、そのような行為が外部に漏れるのを警戒して、「平仮名」ではなく、「片仮名」で記してカモフラージュしようとしたのではなからうか。

七

冒頭部は姫君の母親である故兵衛督女の宰相の君は「いたうもの怨じをし給」い、「御心さがなくぞおはしける」(以上、上・五)左大臣の北の方の女四宮に迫害されたために、姉である尼君の助力により、左大臣には一切知らせずに常陸国に〈失踪〉し、そこで姫君を出産した後、「母君は余りにものを思ひくづはれける名残にや、また、さまざま心深げなることをのみ上(北の方女四宮)の思しけるつもりにや、いと弱くなりて頼みがたかりける」(上・七)結果、死去する。とすれば、姫君の母親の〈失踪〉ないしは〈喪失〉で作品が開始されている。さらに巻末では、逢瀬が度重なるごとに伊予守を思慕していった姫君が今上帝に拉致された結果、伊予守は高雄で出家を遂げた後、善光寺に赴き、「余念なく行なひすまして、いづくにありといふ事を知られじと思ひければ、聞こゆる事なし」(下・一五二)と語られているように、〈失踪〉し、出家したわけだから、俗世間から離脱するのであって、それは俗世からの〈喪失〉を意味するのであり、いわば〈失踪〉ないし〈喪失〉で物語が閉じられていることになる。とすれば、この作品は〈失踪〉ないしは〈喪失〉で首尾照応しているといえようが、以下述べるように、これは『石清水物語』だけに現象化した特色ではない。

『風葉集』に十首採られている『浅茅が露』は冒頭部で帝の寵愛する大納言典侍が源中将に盗み出されて〈失踪〉したことが語り出され、その後に関白の息子である二位中将(後に中納言)は幼なじみの姫宮(父一帝、母一犬納言典侍。後に斎宮)と先坊の姫宮とを〈喪失〉し、姫宮に似た姫君(父一源中将、母一犬納言典侍)と契りを結ぶものの、その姫君も死去する。やがて加持により蘇生するわけだが、後にその姫君は「尚侍」(『風葉集』秋上・二九八など)となったために、二位中将と姫君とは結婚できなかった可能性もあって、二位中将がこの姫君をも〈喪失〉した蓋然性も高く、現存の『浅茅が露』末尾には散逸部分が想定されているために、推測に頼らざるをえないけれども、『浅茅が露』はいわば〈喪失尽くし〉で構成されており、首尾照応していると考えられよう。⁽¹¹⁾

さらに、『風葉集』に三十三首の多くの歌(詞書に一首記されているので、計三十四首となる)が採られている『いはでしのぶ』は冒頭部で内大臣に降嫁した白河帝(後に白河院)の皇女一品宮は内裏から内大臣の住居である一条院に移居した結果、一品宮が降嫁前まで暮らしていた内裏を懐しんでいる様子が連綿と記されており、いわば一品宮の内裏生活の〈喪失〉による悲哀で語り始められている。そして巻末において、関白の息子の右大将が突如出家したことは世俗からの〈喪失〉を意味するのであって、〈喪失〉⁽¹²⁾で作品が閉じられていることになり、首尾照応した作品であるといえよう。⁽¹³⁾

また、『風に紅葉』の冒頭部は「風に紅葉の散る時は、さらでもものがなしきならひと言ひおけるを」と起筆されているように、これは紅葉が風によって散るのであるから、〈喪失〉の表象化であり、男主人公大将(後に内大臣)の父親関白は、昔の大臣の娘と結婚した後、帝(後に朱雀院)と

同腹の女一宮を盗み出したわけだが、その女一宮から生まれたのが大将であった。このように皇女の拉致から語り始められ、巻末は故帥宮女が太政大臣（後に関白）の息子である左衛門督（後に按察使大納言）によって盗み出されたわけだから、女が盗み出されたという点において、〈女〉の喪失⁽¹⁴⁾という事項で共通しているものであり、首尾照応していると考えられる。

以上のように、〈失踪〉ないし〈喪失〉という状況で首尾照応している作品を取り上げたわけだが、『浅茅が露』『石清水物語』『いはでしのぶ』は文永八年（一二二一）に成立したとされる『風葉集』に作中和歌が採られているので、これら三作品は『風葉集』以前に成立したと考えて差し支えなからう。一方、『風に紅葉』は『風葉集』に歌が採られていないという点から、『風葉集』以降の成立と考えられるわけだが、前述した三作品の成立は物語の首尾に関わる構成が〈失踪〉もしくは〈喪失〉という点で類似していることから、現在のところ、辻本裕成の⁽¹⁵⁾いう同時代的作品という横軸の枠組みの中で把握していかなければならないのではなからうか。

さらに、『源氏物語』の最初の巻である桐壺巻において更衣の死が語られ、最終巻である夢浮橋巻の一つ手前の手習巻で浮舟は出家したわけであるから、首尾が〈喪失〉と関係することになり、その構成のありようが中世王朝物語にどの程度影響したのかは単純にはいえないけれども、〈喪失〉という点に注目すれば、中世王朝物語に大きな影を落としていると推測され、それは死Ⅱ〈喪失〉と大いに関わる武士世界の台頭という時代状況とも無縁ではあるまい。あるいは永承七年（一〇五二）に末法に入ったとされておき、その社会的不安が〈喪失〉という考えを増殖させていった可能性も考えられるが、その一方では、不安をかき消すようなカーニバル的色

彩が濃厚な田楽の流行となって現象化した逆説的な動態と根底では深く関わっているともいえるのではなからうか。⁽¹⁶⁾

注(1) 山森雅樹『石清水物語』の構成と問題点（説話・物語論集 第四号 一七六・二）。

(2) 桑原博史『中世物語の基礎的研究—資料と史的考察—』（風間書房 一九六九・九）。

(3) 三角洋一『物語の変貌』若草書房 一九九六・二）が具体的に指摘している。

(4) 土方洋一『石清水物語』研究と資料 日本古典文学①物語文学』明治書院 一九八三・九）は「特定の中心人物を持たず多極的であるが故に、不毛な愛の相関図とも言うべき無常観を堪えた人間模様を浮かび上がらせる」と述べている。

(5) 既に木村朗子『恋する物語のホモセクシュアリティ』青土社 二〇〇八・四）が伊予守の二律背反性を指摘している。

(6) 長谷川政春（〈境界〉からの発想—旅の文学・恋の文学—）新典社 一九八九・11）が伊予守が姫君と情交を成立させた後は、秋の君との同性愛はないと指摘している。

(7) 『狭衣物語全注釈』I巻（上）「鑑賞・研究」（おうふう 一九九九・9。井上真弓執筆）。

(8) 日本古典全書『狭衣物語』下「巻第三之下」補註。

(9) 新潮日本古典集成『狭衣物語』下・頭注。

(10) 新編日本古典文学全集『狭衣物語』②頭注。

(11) 大倉『あさちが露』論—〈喪失尽くし〉の物語—（平安朝文学研究 復刊第七号 一九九八・11）。

- (12) 横溝博(『いはいでしのぶ』右大将「あはれなる事」について―二位中将への告別の場面をめぐって―)『平安文学の風貌』武蔵野書院 二〇〇三・3、「中世王朝物語の通過儀礼」『王朝文学と通過儀礼』竹林舎 二〇〇七・11などは、関白と一品宮姫君との間に若君が誕生し、その若君が関白家という〈家〉の継承者となるために、右大将は出家したと考えている。
- (13) 大倉『いはいでしのぶ』論―喪失―を中心に―(学苑 二〇〇八・1)。
- (14) 大倉『風に紅葉』論―男主人公を取り巻く人間たち―(『講座平安文学論究』第十六輯 風間書房 二〇〇二・5)。
- (15) 辻本裕成「同時代文学の中の」とはすがたり」(『国語国文』一九八九・1)。
- (16) 大倉「未法」への挑戦―『更級日記』と『堤中納言物語』の場合―(『日本文学』二〇〇〇・7)。

*

*

*

本文は次のテキストによるが、作品によっては表記の一部を私に改めた個所がある。なお、『石清水物語』の漢数字は当該ページ数を示す。

- 『石清水物語』『兵部卿物語』『風に紅葉』―鎌倉時代物語集成
- 『虫めづる姫君』『逢坂越えぬ権中納言』『蜻蛉日記』『更級日記』『万葉集』『源氏物語』『狭衣物語』―新編日本文学全集
- 『古今六帖』―新編国歌大観
- 『拾遺集』―新日本古典文学大系
- 『狭衣物語』(伝為明筆本)―吉田幸一編『狭衣物語諸本集成』第一卷(笠間書院 一九九三・10)

(おおくら ひろし 日本語日本文学科)